『沖縄対話』における格助詞「ガ」と「ヌ」について[1]

平子達也
石河優香
新美芽以
小野坂桐

1. はじめに：本研究の背景と目的

本稿では、明治期に沖縄で使用された日本語の教科書『沖縄対話』における沖縄語[2]の格助詞「ガ」と「ヌ」の分布について調査を行った結果を報告する。

野原（1985）などが記述しているように、沖縄語を含む現代琉球諸語・諸方言においては、格助詞の「ガ」と「ヌ」（あるいはそれらに対応する助詞）が、ともに主語を表す格助詞、あるいは、連体格の助詞として用いられることが知られている（＝（1））。

（1）野原（1985：188）の記述

（a）wa:=ga suŋ　「私が　する」（主語を表す「ガ」）

（b）ʔari=ga muŋ　「あれの　物」（連体格の「ガ」）

（c）tʃiburu=nu jamuŋ　「頭が　痛い」（主語を表す「ヌ」）

（d）ja:=nu ʔwi:　「家の　上」（連体格の「ヌ」）

現代沖縄語における格助詞「ガ」と「ヌ」の分布の違いについては、それらが

---

[1] 本稿の内容は、南山大学人文学部日本文化学科科目・日本文化学演習 IAB（2022 年度第 1Q・第 3Q）の中で、担当教員（平子）と受講者（石河・新美・小野坂）とが行った調査研究及びその成果発表（2022 年 11 月 11 日（金）第 3 限）に基づく。成果発表には、同学科の籾山洋介先生のゼミの場をお借りした。発表する場を与えてくださった籾山先生と籾山ゼミの皆さんに感謝申し上げる。

[2] 本土日本語と共通の祖語を持つ琉球諸語は、大きく奄美諸島（鹿児島県）と沖縄本島地域で話される北琉球諸語と、宮古諸島・八重山諸島・与那国島で話される南琉球諸語とに分けられる。このうち、北琉球諸語は奄美諸島で話される奄美諸語と沖縄本島北部で話される国頭諸語、沖縄中南部で話される沖縄語に分けられる（ペラール 2016：100）。本稿で扱う『沖縄対話』中の沖縄語は、琉球王国の王府が置かれた政治的中心であった首里那覇方言（首里語）である。本稿中では単に「沖縄語」とする。

後続する名詞句の有生性階層上の位置によるものとされている。例えば、西岡・仲原（2006：13-14）では、それらが主語を表す場合「主語が人であるとき、代名詞のとき」には ga が、「主に一般名詞のとき」には nu が用いられるとする。

一方で、17 世紀以前の沖縄語を反映するとされる『おもろさうし』における主語の格標示に関して、宮城（2014、筆者未見）のデータを用いて考察している下地（2015：121）は、「『おもろさうし』時代の首里方言の主節においては【他動詞主語】A（ガのみ）、【自動詞主語】S（ガ、ノ、無助詞）という格標示上の非対称性があった」とする（【　】内は本稿筆者による）。下地は、同じ自動詞主語 S であっても、動作主的な S_A（動作動詞の主語）は「ガ」で標示されていた一方、主題や対象となる S_P（状態動詞や変化動詞の主語）は「ノ」あるいは無助詞で標示されていたとし、このように、同じ自動詞主語である S が、その意味役割あるいは述語の動詞の違いによって格標示を交替させることを指して「分裂 S 型」の格標示と呼んだ（同 120-121）。さらに、下地（2015：122）は、現代沖縄語において一部の S_P が無助詞で現れる現象があることについて、それを「『おもろさうし』時代の首里方言においてみられるような明確な分裂 S 型から有標主格型への過渡期」にあるものだとする仮説を提示している。

本稿で対象とする『沖縄対話』は、その成立が 1880 年であり、『おもろさうし』からは時代的にかなり下る。つまり、現代に近い時代の言語の資料ということになるが、当然そこに反映されている往時の沖縄語の格標示のあり方と現代沖縄語のそれとが全く同じとは限らない。仲原ほか（2012）をはじめとする『沖縄対話』の沖縄語を現代首里方言に翻訳するという試みがあることも、『沖縄対話』の沖縄語と現代沖縄語との間に差異があることを反映している。実際、筆者らの調査の結果、『沖縄対話』の沖縄語と現代沖縄語との間には、格助詞「ガ」と「ヌ」の分布のあり方において、（2a-c）に示す異同が見られることが明らかとなった。

（2）『沖縄対話』の沖縄語と現代沖縄語における格助詞「ガ」と「ヌ」の分布

（a）現代沖縄語では、連体格の場合、「ガ」が固有名詞や代名詞あるいは親族名称や人間名詞に使われ、「ヌ」はそれら以外の名詞句に使われる（Shimoji 2012：369-370）のに対し、『沖縄対話』の沖縄語の場合、「ガ」が用いら

れるのは指示代名詞の場合に限られる

(b) 現代沖縄語の場合と同様に、『沖縄対話』の沖縄語においても、主語を表す「ガ」は、主語が代名詞か人間名詞の時のみ使用される

(c) 『沖縄対話』の沖縄語において、(主節中の) 主語名詞句が人間名詞である場合に「ヌ」が付く場合、その述語は継続相アスペクト形式を含むか、存在を表す形式である。これは、現代沖縄語の場合における一部の S_P が無助詞で現れる現象に類する弱い「分裂 S 型」的現象と捉えられうる

以下、本稿では以上 (2a-c) のことについて『沖縄対話』にある例を提示しながら、示していく。本稿の目的は畢竟、『沖縄対話』の沖縄語における格助詞「ガ」と「ヌ」の分布について記述し、沖縄語史上における格標示の変化のあり方を明らかにするための基礎資料を提示することにある。

本稿の構成は以下の通りである。まず 2 節では『沖縄対話』についての説明を行う。3 節では、現代沖縄語における「ガ」「ヌ」の分布について述べる。4 節では、まず本研究の調査方法について触れた上で、調査結果の概要について記述する。5 節はまとめである。

2. 『沖縄対話』と『琉球語便覧』について

琉球王国は 1609 年の薩摩による侵攻を受け、その後 1872 年には琉球藩となり、廃藩置県によって 1879 年に沖縄県となった。琉球列島の共通語としては琉球王国の時代から首里語があって、廃藩置県後の沖縄県でも首里語が重要な役割を果たした。しかしながら、明治政府の教育改革、すなわち、普通教育の普及を目指した学校制度の確立により、沖縄県でも日本語の教育が行われた。1880 年には、日本語の読み書きができる教師の養成を目的とした「会話伝習所」が設置される。同年の間に「会話伝習所」は「沖縄師範学校」として小学校教員の養成を行う機関となる。

本稿で対象とする『沖縄対話』は沖縄県庁の学務課が編纂したもので、1880 年に出版され、当初沖縄師範学校における教師養成のために使われた。後には、小学校においても会話教科書として 1888 年まで使われたという (外間 1971：

64-74)[3]。

『沖縄対話』は、以下の（3）に示す通り、全８章からなり、上下２巻に分かれている。第２章「学校之部」と第８章「名詞之部」以外の各章は、それぞれ４回に分けられている。「学校之部」のみ７回に分けられている。第１章から第７章の内容は、日常的な語句と会話文で、共通語で書かれた本文の横に沖縄語（首里方言）の対訳がカタカナで併記されている。なお、「第８章　名詞之部」は名詞が羅列された、いわゆる単語集となっている。

（3）『沖縄対話』の構成

第１章	四季之部	第５章	遊興之部
第２章	学校之部	第６章	旅行之部
第３章	農之部	第７章	雑話之部
第４章	商之部	第８章	名詞之部

初版発行の２年後（1882 年）には第二版が出版されている。そこでは、章の順番が変更され、「名詞之部」が第１章に配置されている。また、おそらくは教育に適した標準化を目的として、本文の共通語と沖縄語の部分についても訂正されたところがある。

『琉球語便覧』（1916 年）は、『沖縄対話』を用いて日本語を習ったという伊波普猷の監修によるもので、『沖縄対話』をさらに訂正したものと、Basil Hall Chamberlain による Essay in Aid of a Grammar and Dictionary of the Luchuan Language.（琉球語の文法及び辞書に関する論文）とを収めている。そこに含まれる『沖縄対話』の本文は、沖縄語を表記した仮名表記に加えて、伊波によるローマ字転写も添えられており、往時の沖縄語の音声をより復元しやすいようになっている。なお、内容的には『琉球語便覧』にある『沖縄対話』の本文は、初版本によるものだと考えられる。

本稿では、『沖縄対話』初版を用いて調査を行い、その後『琉球語便覧』とも

[3]『沖縄対話』成立のさらに詳しい事情については松永（2008）を参照。

照合したデータを用いる。

3. 現代沖縄語における格助詞「ガ」「ヌ」について

下地（2022：220-222）は、沖縄語（沖縄本島方言及びその属島方言）における格標示について、「概して有生性階層上位（代名詞・固有名詞）に近いほどガを取りやすく、下位（無生名詞）に近いほどヌを取りやすい」とした上で、表1に示すように「代名詞のASでは格標示の欠如が一切生じ」ない一方で、「有生性階層を下るにつれてガ・ヌのオーバーラップが見られ」るとしている。

表1　現代沖縄語の格配列（下地 2022：221 の表4を一部改めて掲載）

<table>
<tr><td></td><td>代名詞・固有名詞</td><td>人間名詞</td><td>動物名詞／無生名詞</td></tr>
<tr><td>A</td><td rowspan="3">ガ</td><td rowspan="3">ガ／ヌ</td><td rowspan="2">ヌ</td></tr>
<tr><td>S_A</td></tr>
<tr><td>S_P</td><td>ヌ／Ø</td></tr>
</table>

後述する様に、『沖縄対話』においては、概して代名詞・人間名詞（固有名詞を含む）の場合には「ガ」を取る一方で、それ以外の場合には「ヌ」をとり、その点では現代沖縄語と大きく変わらない。詳しくは4.3節で述べる[4]。

一方、沖縄語において、格助詞「ガ」「ヌ」はともに連体格の助詞としても用いられる。首里語についての文法概説であるShimoji（2012:369-370）によれば、「ガ」が固有名詞や代名詞、あるいは親族名称や人間名詞に対して使われるのに対し、「ヌ」はそれら以外の名詞句に対して使われる。つまり、現代沖縄語において、助詞「ガ」「ヌ」は、主語を表す場合と同じく、連体格として使われる場合も、有生性階層の上位においては「ガ」、下位においては「ヌ」が用いられるのである。一方で、後に述べるように『沖縄対話』においては連体格助詞としての「ガ」の用例はほとんど見出されず、原則として「ヌ」が用いられる。詳しく

[4] 下地が指摘しているように、現代沖縄語においては、「無生のSにハダカが散見される」、つまり、S_Pの一部が無助詞で現れる。下地によれば、そのSは「出現・不在・発生・消滅をあらわす文（いわゆる存現文）のS」か「二重主語構文の内主語」であるという。本稿は、『沖縄対話』における助詞「ガ」と「ヌ」の分布に関する調査結果を示すものであり、主語が無助詞で現れる場合についての網羅的な調査と考察には至っていない。今後の課題としたい。

は 4.2 節で述べる。

4.『沖縄対話』における格助詞「ガ」と「ヌ」の分布について

4.1　調査概要と調査結果の概要

本節では、『沖縄対話』における格助詞「ガ」「ヌ」の分布に関して、筆者らが行った調査の結果について述べる。調査は、『沖縄対話』の共通語本文の横に書かれている沖縄語訳の中から、格助詞「ガ」「ヌ」を抽出するとともに、それが主語を表すのに用いられているか、連体格助詞として用いられているかを、共通語本文を参考にして判断する、という形で行った。上記の作業を、『沖縄対話』の各章について筆者ら 4 名が分担して行った後、全員で全体のデータを見直した。また、主語を表すのに用いられている場合には、その主語名詞句とともに述語も抽出した[5]。その結果、(4) の 3 点が明らかになった。

(4)『沖縄対話』の沖縄語における格助詞「ガ」と「ヌ」の分布

(a) 連体格としては多くの場合「ヌ」が用いられ、「ガ」が用いられる場合にはいずれも指示代名詞に後続している

(b)『沖縄対話』の沖縄語における主語を表す「ガ」は、主語が代名詞か人間名詞の時のみ使用される

(c) 主節中の主語名詞句が人である場合に「ヌ」が付くとき、その述語は状態的なアスペクト形式を含むか、存在動詞あるいは変化動詞である

以下、4.2 で（4a）の点について、4.3 で（4b, c）について詳しく述べる。

4.2　連体格「ガ」「ヌ」についての分布

『沖縄対話』全体で、連体格助詞として認められる「ガ」「ヌ」の例は 241 個見

[5] 今回の調査では、節タイプによる場合分けは行わず、主節・従属節・連体節にかかわらず、全ての主語名詞句を述語とともに抽出した。一部、連体節中の主語であることが格標示のあり方に関わると思しき例もあった（4.3 節を参照）。その例の位置付けを含めて、節タイプの違いによる格標示のあり方の違いに関する問題は、今後の課題としたい。

つかったが、格助詞「ガ」「ヌ」のうち、「ヌ」については以下に示すような連体格の助詞としての使用例が多数確認できたものの、「ガ」については連体格としての使用例が３つしか確認できなかった（＝5a-c）。すなわち、ほとんどの場合、(5d-i）のように連体格助詞としては「ヌ」が用いられるのである。

(5）連体格「ヌ」の例

(a）ウリガ デーヤ　「其代価ハ」　（第２章３回）【代名詞（敬意なし）】

(b）クリガ デーヤ　「此直ママ段ハ」　（第４章２回）【代名詞（敬意なし）】

(c）ウリガ シチヤナカイ　「其次ニ」　（第５章４回）【代名詞（敬意なし）】

(d）ウンジユヌ シナ　「貴方ノ　品」　（第４章３回）【代名詞（敬意あり）】

(e）シンルイヌ トクルンカイ　「親類ノ　所ニ」（第７章３回）【人間名詞】

(f）シシヤウヌ トクルンカイ　「先生ノ　宅ニ」（第２章６回）【人間名詞】

(g）ジユフークワンヌ ガク　「徐葆光ノ　額」（第６章４回）【固有名詞】

(h）トウキヤウヌ クトバ　「東京ノ　言葉」（第２章４回）【固有名詞･場所】

(i）キーヌ カー　「木ノ皮」　（第７章２回）【無生名詞】

既に述べたように、Shimoji（2012）によれば、現代沖縄語の格助詞「ガ」「ヌ」が連体格として使われる場合、有生性階層の上位に位置付けられる名詞句（固有名詞、代名詞、親族名称、人間名詞）に対しては「ガ」、下位の名詞句（動物名詞、無生名詞）に対しては「ノ」が用いられる。注目されるのは、『沖縄対話』において「ガ」が用いられる（5a-c）の場合、それが後続している名詞句が、指示代名詞「ウリ」（それ）あるいは「クリ」（これ）であることである。

一方、有生性階層の下位に位置付けられる無生名詞のみならず（＝5h, i）、階層の比較的上位に位置付けられる固有名詞（5g）や人間名詞（5e, f）に対しても「ヌ」が用いられる[6]。さらに注目すべきは、「ウリ」「クリ」と同じ代名詞であり

ながら共通語訳で「貴方」が当てられている「ウンジユ」の場合に「ヌ」が用いられる点である。国立国語研究所（1969：559）によれば、『沖縄対話』の「ウンジユ」に対応すると考えられる ʔuNzu は、「目上および、親しくない同等に礼をもって対する時の、二人称」とされている。このことから考えると、同じ代名詞ながら、「ウリ」と「ウンジユ」とでとる格助詞が異なるのは、敬意の有無が関わると考えられる。しかしながら、『沖縄対話』中で代名詞に連体格助詞「ガ」「ヌ」が続いた例は上述の「ウリ」・「ウンジユ」の他には「ウンジユナー」（あなた方）に「ヌ」の続いた例しかなく、これ以上の詳細な議論はできない。

4.3　主語を表すのに用いられる「ガ」「ヌ」の分布

『沖縄対話』全体で、主語を表すのに用いられた助詞「ガ」「ヌ」の例は 97 個あった。そのうち、「ガ」は 16 個、「ヌ」は 81 個用いられていた。数の面から見ると有標と考えられる主語を表す「ガ」は、原則として（6a-c）のような代名詞や、（6d-e）のような人を表す名詞（人間名詞）が主語となる場合にのみ使用されている。一方、代名詞及び人間名詞以外が主語となる場合には、「ヌ」が用いられる（＝6f）。

（6）主語を表す「ガ」「ヌ」の例

（a）ワツターガン。ユマリソーナ。シユムツ　　「私共デモ読メル様ナ本」（第 2 章 7 回）

（b）ワーガ。ウイトマニ。ユシリール。カンゲー　「私ガ御暇乞ニアガル積リ」（第 6 章 3 回）

（c）クリガドンメーニン。ユタシヤイドンセー　「コレガ年々、ヨクナリマシタラ」（第 3 章 1 回）

（d）ヤスウイシヤーアチ子ーガ。チツ　　「安売商人ガ来テ」（第 4 章 4 回）

[6] なお、動物名詞に連体格助詞がついた例は資料中に見つかっていない。

(e) カウヤーガ。ズングエーウホークナテ 「買人ガ思ノ外多クナリマシテ」
(第4章4回)

(f) サタウヌ。ンジトウヤビーン 「砂糖ガ、出来マシタ」
(第3章1回)

つまり、原則としては、有生性階層上の名詞句の位置の違いによって「ガ」と「ヌ」の分布が決まっている、すなわち、名詞句階層で上位にある代名詞及び人間名詞が主語になる場合には「ガ」が、そうでない場合には「ヌ」が用いられるという分布になっていると言える。しかしながら、ごく少数の例ながら、(7) のように「ヌ」が人間名詞や代名詞に後続する場合もある。この場合、述語がアスペクト形式を含むか、存在動詞であることが注目される。

(7) 人間名詞と代名詞の主語をとる「ヌ」

(a) ウンジユヌ。オソダテニ。ナトール。ウグイシン
「貴方ノ、御育テニ、ナリマシタ、鶯モ」(第1章1回)

(b) ハナシナユルムンヌ。ウヤビーミ
「話セル人ガ、ゴザリマスカ」 (第2章4回)

(c) ンジイリシヤツチユルムンヌ。カンゲータウヤビークト。
「出入ノ者ガ、心得テ居リマスカラ」 (第5章2回)

(d) アン子ーシヤヌ。ウヤビーカヤー
「案内者ガ、ゴザリマスカ」 (第5章4回)

(e) ブンケンタイヌ。イツチヤウンカンデイチ。チチヤビタン。
「分遣隊ガ、入テ居ルトカ、聞キマシタ」(第6章3回)

(f) キガニンヌ。サンジフハチクニンンデガヤラ。イユルグトーヤビーン。
「怪我人ハ、三十八九名トカ、申コトデゴザリマス」(第7章3回)

(7a) は連体節中の主語で、このような場合、現代日本語においても連体格助詞「の」での主語標示が可能である(注5も参照)。節タイプの違いによる格標示の分布の違いについては、平子 (2016) の報告する出雲方言においても見られ

るものである。この場合も、節タイプが格標示に影響を与えていることも考えられるが、ひとまず本稿では考慮外に置くこととする[7]。

（7b）と（7d）はともに存在動詞（の敬語形）「ウヤビー（ミ／カヤー）」（訳は共に「ゴザリマス」）を述語とする。（7f）も、述語動詞は顕在していないが、意味的には「三十八九名の怪我人が存在している」ということを意味し、（7b, d）に類するものと解釈できる。一方、（7c）の述語「カンゲータウヤビークト」は、『琉球語便覧』では kangēti wuyabī kutu とされている。この -ti wuyabī - という形式は、現代沖縄語（首里方言）の継続相の丁寧形 -toojabii-（国立国語研究所 1963:77）に対応する形式と考えられる。また、（7e）の「イツチヤウン」は、『琉球語便覧』で itchōn と表記されており、現代沖縄語の iQch-oo-N に対応する形式（国立国語研究所 1963：59–61, 71–73）、つまり、継続相アスペクトの接辞 *-oo-* を含むと考えられる。

ここまで見たように、（7b-f）の人間名詞が主語にもかかわらず、「ヌ」が用いられる場合、その対応する述語は、その名詞句の存在を表すものか、継続相アスペクトを表すものばかりであった。継続相アスペクト形式の解釈が問題となるが、坂井（2013）の報告によれば、現代熊本市方言においては、通常は主語標示に「ノ」が許容されない親族・固有名詞が主語になる際に、アスペクト接辞 -jor-/-tor- が述語に含まれれば、「ノ」が許容されるという現象が見られるという（坂井 2013：81–82）。『沖縄対話』の沖縄語における（7c, f）のような例は、この現代熊本市方言におけるそれに類するものと捉えられる。

アスペクト接辞を含むものの位置付けが問題となるが、それをここで除けば、『沖縄対話』の沖縄語において、人間名詞の主語標示に「ヌ」が用いられる場合、その述語は存在動詞に限られる、つまり、この時に「ヌ」が表示しているのは S_P と捉えられる。

---

[7] ここで「ヌ」が用いられている他の要因として考えられるのは、敬意の有無である。「ウンジュ」という 2 人称代名詞が聞き手に対して敬意を表すのに使われることは 4.2 節でも述べたが、敬意の対象となるものが主語となる場合に「ガ」ではなく「ヌ」（あるいは、それと同源の「ノ」）が用いられるという現象は、琉球諸方言はもちろん、出雲方言（平子 2016）などでも見られる。あるいは、述語「オソダテニ。ナトール」の「ナトール」は、明らかに継続相アスペクトの接辞 *-oo-* を含むものであり、それが関係している可能性もある。

このように、『沖縄対話』の沖縄語において、人間名詞が主語である場合のほとんどが「ガ」で格標示される中で、一部の S_P と捉えられるものが「ノ」で標示されるという様相は、下地（2022）の言う、弱い「分裂S型」的な格標示と認めることができると考えられる。

5. まとめと考察

ここまで、明治期の沖縄語を反映しているとされる『沖縄対話』における格助詞「ガ」と「ヌ」の分布について調査した結果を示した。調査の結果、明らかになったことを、現代沖縄語と比較して整理すると、以下のようにまとめられる。

(8)『沖縄対話』の沖縄語と現代沖縄語における格助詞「ガ」と「ヌ」の分布［＝(2)］

(a) 現代沖縄語では、連体格の場合、「ガ」が固有名詞や代名詞あるいは親族名称や人間名詞に使われ、「ヌ」はそれら以外の名詞句に使われる（Shimoji 2012：369-370）のに対し、『沖縄対話』の沖縄語の場合、「ガ」が用いられるのは指示代名詞の場合に限られる

(b) 現代沖縄語の場合と同様に、『沖縄対話』の沖縄語においても、主語を表す「ガ」は、主語が代名詞か人間名詞の時のみ使用される

(c)『沖縄対話』の沖縄語において、（主節中の）主語名詞句が人間名詞である場合に「ヌ」が付く場合、その述語は継続相アスペクト形式を含むか、存在を表す形式である。これは、現代沖縄語の場合における一部の S_P が無助詞で現れる現象に類する弱い「分裂S型」的現象と捉えられうる

さて、17世紀以前の沖縄語を反映するとされる『おもろさうし』における主語の格標示に関して、宮城（2014）のデータを用いて考察している下地（2015：121）は、「『おもろさうし』時代の首里方言の主節においては【他動詞主語】A（ガのみ）、【自動詞主語】S（ガ、ノ、無助詞）という格標示上の非対称性があった」とする（【　】内は本稿筆者による）。また、下地は、同じ自動詞主語Sであっても、動作主的な S_A（動作動詞の主語）は「ガ」で標示されていた一方、主題

や対象となる S_P（状態動詞や変化動詞の主語）は「ノ」あるいは無助詞で標示されていたとする（同 120-121）。

このように、同じ自動詞主語である S が、その意味役割あるいは述語の動詞の違いによって格標示を交替させることを指して、「分裂 S 型」の格標示と呼ぶが（下地 2015）、さらに下地（2015：122）は、現代沖縄語における無助詞で主語が現れる現象を「『おもろさうし』時代の首里方言においてみられるような明確な分裂 S 型から有標主格型への過渡期の状況を示」すもの、とする仮説を提示している。そして、『おもろさうし』時代の沖縄語から、現代沖縄語にかけて、「ヌ」（『おもろさうし』では「ノ」と表記）の分布が徐々に広がり、それがかつて無助詞で現れていた領域まで侵入しつつあるとする（下地 2019：34 も参照）。

この下地の仮説に照らした時、(8b, c）で示した明治期の沖縄語資料である『沖縄対話』における主格助詞「ガ」「ヌ」の分布のあり方は、『おもろさうし』よりも「ヌ」の領域が拡大しており、より現代沖縄語の様相に近づいているものと考えられる。

ただ、節タイプについての検討や、無助詞名詞句やアスペクト形式を含む場合の位置付けといった問題は多く残っている。今後の課題としたい。

参考文献

坂井美日（2013）「現代熊本市方言の格標示」『阪大社会言語学ノート』11：66-83.

下地理則（2015）「琉球諸方言における有標主格と分裂自動詞性」『方言の研究』1：33-50.

下地理則（2019）「現代日本共通語（口語）における主語の格標示と分裂自動詞性」竹内史郎・下地理則（編）『日本語の格標示と分裂自動詞性』1-36. 東京：くろしお出版.

下地理則（2022）「日琉諸語の格体系：概観と類型」木部暢子・竹内史郎・下地理則（編）『日本語の格表現』205-237. 東京：くろしお出版.

仲原穣・比嘉恒明・仲里政子・新垣恒成・国吉朝政（2012）「現代首里方言訳『沖縄対話』（1）：「第一章　四季の部」（春・夏）」『沖縄芸術の科学　沖縄県立

芸術大学附属研究所紀要』24：25-31.
野原三義（1985）「琉球方言助詞瞥見」『沖縄文化研究』（法政大学沖縄文化研究所）11：187-222.
平子達也（2016）「出雲方言における格助詞「ガ」と「ノ」について」木部暢子（編）『消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究 出雲方言調査報告書』（国立国語研究所）69-77.
ペラール　トマ（2016）「日琉祖語の分岐年代」田窪行則・ジョン　ホイットマン・平子達也（編）『琉球諸語と古代日本語：日琉祖語の再建にむけて』99-124. 東京：くろしお出版.
外間守善（1971）『沖縄の言語史』中央公論社.
松永　歩（2008）「近未来予想図としての『沖縄対話』：沖縄の近代化に関する一考察」『立命館国際地域研究』27：91-109.
宮城愛実（2014）「『おもろさうし』における主格表示について：王府オモロから首里方言へ」九州大学大学院修士論文.
Shimoji, Michinori（2012）Northern Ryukyuan, In: Tranter, Nicolas（ed.）*The languages of Japan and Korea*（Routledge Language Family Series）, 333-380. London/New York: Routledge.

附記
本研究は、JSPS 科研費（19H01255）の助成を受けたものです。